

子どもたちは学校のインターネットで何を見ているのか?
アメリカ西部の公立学校の場合
近江 玲 (お茶の水女子大学)

情報教育の重要性が声高に主張されるにつれ、学校を始めとする教育現場へのインターネット導入は急速に進みつつある。生徒が自由にインターネットを使用できる学校は、今後ますます増えていくと思われるが、実際に生徒たちはインターネットを適切に利用できるのだろうか?今回は、インターネット先進国であるアメリカの中高生が、どんな目的でWWWを利用するのか、実際の利用状況はその目的を満たしているのか、ということ調査した研究を紹介する。この調査結果は、日本における中高生のインターネット利用のあり方を考える上でも、参考になるだろう。

現在、インターネットは効果的な教育メディアとして、様々なかたちで学校現場に取り入れられている。それに伴い、生徒たちが自由にインターネットを使用するような環境を整える学校の数も増えてきた。しかし、子どもたちに自由にインターネットを利用させることについては不安もある。子どもたちは膨大な情報の中から、自分たちに適したものを見つけられるのか?アダルトサイトを始めとする、社会的に望ましくない内容のサイトから悪影響を受けはしないだろうか?ちゃんと学習や調査といった教育的な目的のためにインターネットを利用しているのだろうか?

このような不安を受け、エバーソール¹⁾はアメリカにおける中高生のWWW利用状況を調査した。彼らは生徒たちがWWWを適切に利用できているか調べるために、生徒にWWW利用目的を自己評価させるとともに、生徒たちが実際に閲覧しているサイトを記録した。サイトの内容はメディア専門家によって評価され、その評価と生徒の自己評価によるWWW利用目的を比較する事によって、生徒たちがWWWを目的に即して利用しているかどうか検討した。

研究概要

調査対象 アメリカ西部の5つの地区にある公立の中学校、高校で、インターネット設備が整えられている学校のうち、1つの地区につき中学校、高校それぞれ1校ずつ、計10校を選出した。調査は、これらの対象校においてインターネット利用を登録している生徒が、学校のパソコンからインターネットに接続するたびにサーバー上で活動内容を記録して行った。最終的な被調査者数は延べ人数で1083人(男子59%、女子41%)であり、各学年10%前後の割合で含まれていた。

調査内容 生徒による自主報告:生徒がインターネット接続するごとに、学年と性別、WWWの使用時間、今どんな目的でWWWを利用しているか、を問う質問が表示された。WWWの利用目的に関しては、「調査・学習」「他人との交流」など6項目の中から選択するか、どれにも当てはまらない場合は自由記述させるかたちで回答を求めた。調査において名前や学生番号を記入する必要はなく、匿

名性が維持された。 専門家による評定：生徒が閲覧したサイトの軌跡はサーバーに記録された。そのうちランダムに選ばれた 500 サイトについて、二人のメディア専門家が調査・学習への適正度、適した利用目的を評定した。

なお調査は、各校における調査回答数が 100 を超えるまで続けられた。

生徒による自己評定の結果

WWW の使用時間：1 週間に WWW を使用する時間について、割合が高い順から「1 時間以下」36%、「1～2 時間」23%、「3～5 時間」18%、「10 時間以上」17%、「6～10 時間」6%、という結果となった。

WWW の使用目的：割合が高い順から、「調査・学習」、「何か楽しい事を探す」、「他人との交流」、「スポーツ・ゲームに関する情報収集」、「WWW 特有の活動」、「暇つぶし」、「その他」であった(図 1 参照)。

専門家による評定の結果 生徒が閲覧したサイト数は計 123,071 サイトであった。そのうちランダムに 500 サイトが選ばれ、調査・学習への適正度と適した使用目的が、2 人のメディア専門家によって評定された。

調査・学習への適正度：適正度は、「適していない」「どちらとも言えない」「適している」の 3 段階で評定された。その結果、最も多かったのは調査・学習に「適していない」とされたサイトで全体の 57%、続いて「適している」と評定されたサイトが 29%、「どちらとも言えない」が 14%という割合であった。

適した使用目的：サイトの内容から適した目的を評定した結果、「調査・学習」に適していると評定されたサイト数が最も多く、続いて「WWW 特有の活動」、「何か楽しい事を探す」、「買い物・消費に関する情報収集」、「暇つぶし」、「スポーツ・ゲームに関する情報収集」、「他人との交流」という順であった(図 2 参照)。

考察 今回の調査の結果、半数以上の生徒が WWW を「調査・学習」のために利用すると答えたにも関わらず、専門家によって調査・学習に適しているとされたサイトは全サイトの 30%程度であった。つまり、生徒たちが WWW を利用する際自己評定した目的と、実際に見ているサイトから専門家により適していると評定された目的との間には不一致が見られた。この理由として以下の 4 点が考えられる。まず一つには、生徒と専門家との間にはサイトの内容、または利用目的に関して解釈の違いがあるということである。つまり、同じサイトであっても、専門家にはある目的における適正度が低いと判断され、生徒には高いとみなされる可能性がある。二つ目に、生徒が社会的に望ましい態度をとろうとし、自主報告の際本来の目的を報告しなかったことが考えられる。今回の調査では匿名性が保たれたが、万が一のことを考え、自分だと分かっても支障がないような回答をしたことはあり得るだろう。三つ目は、WWW を利用しているうち当初の目的に適さないサイトに誘惑されてしまった、あるいは途中で目的が変わったということである。最後に、「調査・学習」に対する生徒の概念が広義であるということである。専門家にとっては「調査・学習」に適さないサイトを見る行為も、生徒たちは調査・学習に含めているのかもしれない。

今回の調査からは、生徒による自己評定と専門家による評定がなぜ異なったのか特定する事はできないが、今述べた 1 番目の可能性は、生徒がサイトの内容を不適當に解釈していることを示唆している。

今回の研究には、調査対象が公立学校のみだったこと、WWW の利用が生徒に

よる自主的なものだったのか、教師に勧められたものだったのか区別できなかったこと、匿名性を維持するために、生徒には自主報告させた利用目的と実際の利用との関連がわからなかったこと、各サイトの閲覧時間や偶然そのサイトを訪れたのかどうかを判別できなかったことなどが、問題点としてあげられる。従って、本研究結果をそのまま中高生の利用実態として一般化することはできない。しかし、生徒たちが実際に閲覧しているサイトが調査・学習に適していない可能性が示唆されたことは、中高生のインターネット利用のあり方を考える上で重要な問題提起となるだろう、とエバーソールは主張している。

既に議論されていることではあるが、インターネットは他の教育メディアと異なり、生徒が閲覧するサイトを教師が指定できない。そのように自由に多彩な情報を獲得できるというのがインターネットの利点でもあるが、それは同時に生徒たちが彼らに悪影響を及ぼす、社会的に望ましくないサイトを容易に見る事ができる危険性をはらんでいる。

エバーソールはこの研究の結果から、インターネット利用を生徒たちに任せるならば、彼らが利用目的に即したサイトを選択できるようなサポートや指導が教師らによってなされる必要があると述べた。

コメント

エバーソールは調査の結果から生徒がサイトの内容を適当に解釈できていない可能性を指摘し、インターネット利用に関する指導の必要性を強調した。しかし、この結論づけに関しては疑問を感じる部分がある。

まず、彼自身が指摘しているように本研究には計画上の限界がある。また、それ以上に注目すべきは、生徒による自己評定と専門家による評定が異なった理由として4番目に挙げられた、「調査・学習」に対する両者の概念が異なるという可能性である。生徒たちは、確かに「調査・学習」という目的とは一見無関係のサイトを見ていることもあるだろう。しかし、そのようなサイトを閲覧する事は生徒にとって無利益かと言うと、一概にそうとは言えまい。多様な情報に触れることにより、学習意欲が刺激される、新たな問題意識が起こる、もしくは異なった視点から問題をとらえ直すことができるといった、調査・学習をより有意義にする効果がもたらされることは有り得る。このような幅広い情報収集によって可能になる拡散的学習は、従来の教育メディアでは実現しにくかった性質のものであり、インターネットを用いて初めて可能になると言っても過言ではない。今回の研究結果は、このような視点を踏まえて考える必要があるだろう。

教育メディアとしてのインターネットの可能性は現在のところ未知数である。その可能性を解明し、より一層の教育現場におけるインターネットの活用を検討するために、今後も様々な利用実態調査が実施されることが望まれる。

引用文献

1) Ebersole, S. (2000) Uses and gratifications of the web among students. *Journal of Computer-Mediated Communication*. [On-line]

近江玲 2001 「子どもたちは学校のインターネットで何を見ているのか? - アメリカ西部の公立学校の場合 -」 NEW 教育とコンピュータ, 学習研究社, 17(9). 104-105,

<http://www.ascusc.org/jcmc/vol6/issue1/ebersole.html> (Sep, 2000)

(自己紹介)

近江 玲(お茶の水女子大学 人間文化研究科 博士前期課程)

インターネットが人間の心理に与える影響や、日常生活におけるより有効な活用法に興味があり、これから研究していきたいと思っています。